日蓮大聖人御書全集

宿屋入道への再御状

やどやのにゅうどう　さいごじょう

新版853

宿屋入道への再御状

文永5年('68)9月　47歳　宿屋光則

去ぬる八月の比に愚札を進らせしむるの後、今月に至るも是非につけて返報を給わらず、鬱念散じ難し。恩々の故に想亡せしむるか。軽略せらるるの故に、慳□一行か。本文に云わく「師子は少兎を蔑らず、大象を畏れず」等云々。

もしまた万が一、他国の兵、この国を襲う□出来せば、知って奏せざるの失、ひとえに貴辺に懸かるべし。

仏法を学ぶの法は、身命を捨てて国恩に報ぜんがためな

り。全(まった)く自身(じしん)のためにあらず。本文(ほんもん)に云(い)わく「雨(あめ)を見(み)て竜(りゅう)を知(し)り、蓮(はちす)を見(み)て池(いけ)を知(し)る」等云々(とううんぬん)。災難急(さいなんきゅう)を見(み)るの故(ゆえ)に、度々(たびたび)これを驚(おどろ)かす。用(もち)いざるに、しかもこれを諫(いさ)む。強(きょう)。